



Title	＜紹介＞斎藤理生著『小説家、織田作之助』
Author(s)	武久, 真士
Citation	語文. 2020, 115, p. 80-80
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88517
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

斎藤理生著『小説家、織田作之助』

武久真士

本書は、従来単に大阪を描いた作家だという理解で片付けられてきた織田作之助の小説を、形式上の実験や初出誌面との連動といった観点から再読したものである。西村ツチカ氏による美しい装丁や、「です・ます」体の採用によるやわらかな外見とは裏腹に、作之助に関する最新の研究成果を集めた学術書となっている。

本書の重要な特徴は、作之助の小説における方法論的な部分に注目している点だろう。例えば第Ⅰ部の『夫婦善哉』論では、作之助が反復・列挙・要約などの小説技法を用いて、系譜小説としての圧縮された時間の流れ方を表現していることが指摘されている。同じく『世相』論では、世相の「語りにくさ」を前景化させる形式によって、混乱した世相を描くという手法がとられていることが明らかにされている。『世相』に限らず多くの作品が語りの構造という観点から分析されており、「何を書いたか」だけでなく「どのように書いたか」を重視する本書の問題意識がそこにあらわれていると言えるだろう。

加えて、そうした作之助の方法論上の工夫が丹念な資料調査によって実証されている点も見逃せない。本書に収録された多くの論で、織田文庫における草稿や蔵書の調査が生かされている。さらに、新聞小説に注目した第Ⅲ部では、「京都日日新聞」や「大阪

新聞」など従来注目されることの少なかった地方紙がクローズアップされている。そこでは、『清楚』や『それでも私は行く』などの新聞連載小説における、小説の内容と新聞誌面の連動が示されることになる。初出誌の調査を通して、当時の読者が成し得た作品鑑賞や作之助が意図した同時代への批評性を剔出することにより、作品の立体的な理解が可能になっているのだ。このように、具体的な資料から作之助の仕掛けが明らかにされていることも、本書の重要な成果である。

また、作之助の作品を典拠となった作品と比較するというアプローチによって、より彼の独自性が見えやすくなっている。特に宇野浩二や太宰治との比較を通して作品の再考を行う第Ⅱ部においては、そうした手法が全面的に採用されており、作之助の小説構成上の工夫が明らかにされている。そこに現れるのは、先行作品を利用しつつずらすことによって独自の小説を作り上げていく、したたかな作之助の姿である。

形式の実験、誌面との連動、先行作品の利用、語りの構造などの分析に紙幅の多くを割く本著は、「作之助の作品を、大阪やデカダンといった出来合いのイメージではなく、その方法から見直す」(二四七頁)という問題意識に貫かれている。まさに、文章を書くプロとしての技術を磨き続けた「小説家」としての織田作之助像が前面に押し出された著作だと言えるだろう。

(大阪大学出版会、二〇二〇年一月、三六八頁、二、三〇〇円＋税)

(たけひさ・まこと 本学大学院博士後期課程)